

調査報告： COVID-19

新聞記事にみる情報トレンド分析 -4-

関西大学社会安全学部 准教授 近藤誠司 2020.5.5.

1. はじめに —無常というコンセプト—

筆者は、東日本大震災が発災して1年余り経過した段階で、「無常」という言葉が新聞紙面でどのように使用されていたか分析したことがある¹⁾。全国紙を対象として、日経テレコンの記事横断検索機能を活用して、2011.3.11 から 2012.3.10.までの期間で、「無常」という言葉を含む記事を抽出したところ、全部で69本、見つけることができた。

ここで着目したのは、「無常」という言葉を使っている「発話者」の種別と、発話された文意（意味内容）である。まず前者に関しては、分析結果を一部修正して、再掲しておこう（図1）。各カテゴリーには重複して該当する人が含まれている（「宗教家」であり「作家」である人など）。発話者には芸術家や作家、宗教者が多く、概していえば、「知識人」と呼ばれる人たちが、紙面を通して巨大災害の無常さを読者・市民に訴えかけていた。もしくは、発話者に記者が多いこともふまえると、類似した言質を意図的にメディアが呼び込んでいたきらいがある。

ところで、後者の分析、すなわち、「無常」に込められた意味内容に関しては、多義的かつ多重的だったことが見出されている。(1)万事移ろいゆくものであるという事実の再確認、(2)その認識を前提にした諦めの境地、(3)諦めという後ろ向きの構えを超越した泰然自若を説く構え、さらに、(4)無の境地からであればこそまたあらたに歩みだせるという「明るい無常感」、しかし、(5)未来志向の無常感には過去を無に帰する陥穽があるとの批判的な視座、そして、(6)無常を無情・非情と読み間違えた誤用である。

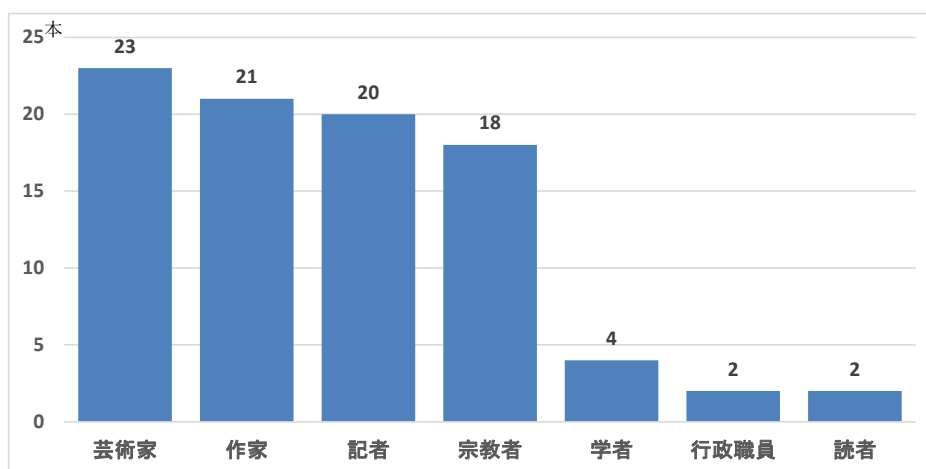


図1 東日本大震災の最初の1年間で出現した「無常」を含む新聞記事本数(MA)

さてここであらためて注目しておきたいのは、(5)のコンセプトである。堀田善衛(1988)²⁾が指摘しているような、「無常観³⁾の政治化」の謂いである。堀田は、戦災などを念頭においてこのコンセプトを洞察しているのだが、ポイントは、眼前の事態を人為・人災とみなすのか、それとも、自然の猛威とみなすのか、その力点の措き方にある。東日本大震災に関していえば、起点となった地震や津波の発生を自然の猛威とみるにせよ、被害の拡大要因となった原子力発電所の爆発事故までも「無常」の論脈で語るのに行きすぎではないかという指摘もあった。

それでは、新型コロナウイルス感染症は、現在どのような位置づけがなされているのだろうか。本稿の問題意識は、この点を考えるよすがとなる、現時点のベースデータを得ることにある。なお、あらかじめ注釈しておく、2011年が親鸞上人の750回忌であったことや、法然上人の没後800年忌であったこと、さらに2012年は鴨長明が『方丈記』を世に送り出してから800年であったことなども作用して、東日本大震災においては「無常」という言葉が“頻出ワード”のひとつになっていたきらいもある。その点、「二つの3.11—東日本大震災3.11とパンデミック宣言3.11—」を同列に比較することには限界がある。

2. 手法：新聞データベースによる簡易検索

全国紙の新聞記事を対象としたデータ分析を実施した。使用したデータベースはそれぞれ、読売新聞社「ヨミダス歴史館」、朝日新聞社「聞蔵Ⅱビジュアル」、毎日新聞社「毎索」、そして、日本経済新聞社「日経テレコン」である。「聞蔵Ⅱビジュアル」では、デジタル記事、アエラなども対象に含めて一括検索した。「日経テレコン」では、日経各紙をすべて対象として一括検索した。「毎索」では、号外や別刷りなども検索対象に含めた。

3. 結果：「無常」の該当記事トレンド分析

まず、2020年1月1日から4月30日までの期間で、「コロナ」と「ウイルス」を「&検索」した結果、該当記事本数は図2に示すとおりとなった。「ヨミダス歴史館」が最多で、2,3815件、最少は「毎索」で6,649本、55.0 per dayというボリュームであった。

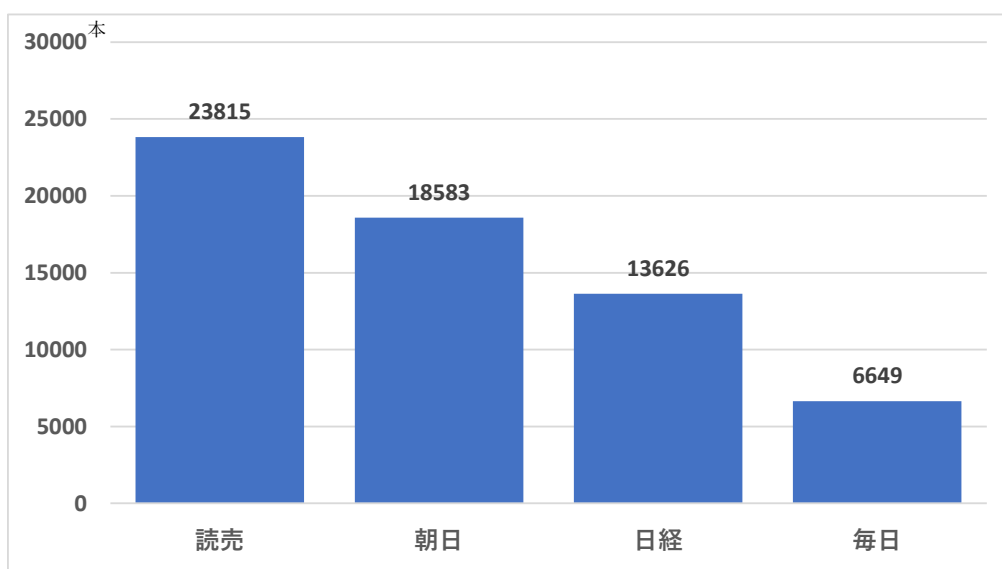


図2 新型コロナウイルス関連の該当記事本数(2020.1.1.~4.30.)

さて、肝心の「無常」であるが、ヒットした記事本数は、合計3本（聞蔵IIビジュアル2本、毎索1本）であった。この少なさ、端的には、調査時期がまだ早いことに起因していると考えられるが、もうひとつは、新型コロナウイルス感染症が、「無常」と呼ぶほど人智を超えた出来事としてではなく、人類が制御できる“掌中のリスク”として社会に感覚されていることによるものだと考えることもできる。

記事内容を時系列におさえておくと、初出は、毎日新聞3月26日の東京夕刊で、東京都が週末の外出を自粛するよう要請したなかで、上野公園の花見がどのようにおこなわれていたかをスケッチした記事の結語として使われていた。いわく、「諸行無常、満開となった桜を誰が見るのだろうか。コロナ禍の下、それでも桜は咲き、そして散っていく」。

2つ目は、朝日新聞4月5日の朝刊、日曜版のリライフ面であった。60代、無職男性の投書の、やはり結びの部分に置かれていた。家族での花見が取りやめになって、高齢の母に会えなくなったことにふれたのち、「そして来春はと思うとき、一瞬だが、桜の爛漫たる美しさのなか、人が生きることへの無常を感じる」と締めくくっている。

3つ目は、朝日新聞4月24日朝刊、文化文芸面において、自粛ムードのさなかで著名な居酒屋がどうなっているかを、編集委員が電話取材して書いたエッセイ風の記事であった。見出しは、「あの酒場、どうしているだろう 文化的空間 街の止まり木に誠実な補償を」である。文中、とあるライターのリポートとして、「他者との出会いや語らいを通し、生きる喜びや世の無常、はかなさを学ぶ。それが酒場なんです」と言わしめている。

このようにして概観してみると、東日本大震災の発災時に顕著に現れた「無常」の多義的な表出は現時点では全く見られず、上述した(1)ないしは(2)の素朴なコンセプトが確認できる程度であることがわかった。そしてこの点からも、新型コロナウイルス感染症をめぐる社会的な混乱に対して、人々は、東日本大震災の際にひしひしと感じていたような「被災者を助けたいのに手をさしのべきれないもどかしさ、圧倒的な自然の猛威に対する謙虚な思い、どうしようもなさ、やるせなさ、人知の及ばなさ」等とは全く異なる次元の感覚を持っていることが確認できる。それは、言うなれば、「本来であればうまく統御できた 이슈なのに、そうはなっていないことに対するシンプルな苛立ちと不満、そして、支援者や罹患者が加害者になることもありえるため、手をさしのべるモチベーションが高まりきらない戸惑い」等が渦を巻いたフィーリングである。

社会が言葉を規定し、言葉が社会を規定する以上、今後も、このような社会的な指標となり得る言葉の使われ方に目を向けていく必要があるだろう。

- 1) 近藤誠司(2012)“無常”をめぐる社会的リアリティ –3.11に関する災害報道の内容分析と基礎的な考察–, 第31回日本自然災害学会学術講演会講演概要集.
- 2) 堀田善衛(1988) 方丈記私記, 筑摩書房.
- 3) ここでは原文ママとしておく。無常感と無常観の違いには深入りしない。なお、たとえば、2010年6月10日、作家の村上春樹氏がカタルーニャ国際賞授賞式で語った「MUJO」(非現実的な夢想家として)には、本稿で整理した多義的なニュアンス(1)~(5)が緻密に網羅されていた。

本稿に関する問い合わせ
関西大学社会安全学部 准教授 近藤誠司
072-684-4000 kondos@kansai-u.ac.jp
○の箇所に@を挿入してください